

共有文明とアジア

濱田 陽

1 共有文明とアジア

限りあるものと限りないもの
 新文明の理念：共有 (commonship)
 共有原理と生命資本主義
 多地域・多領域革命

2 共有創出と三国

共有創出
 現代生活における共有
 伝統文化の共有
 自然の共有、自然との共有

3 新文明の共有軸

旧文明の軸からの離脱
 共有宗教文化
 共有技術
 生命自然

文献

付節 東アジア共有文化遺産の夢

1 共有文明とアジア

限りあるものと限りないもの

文明を、有限と無限の関係で考えてみよう。

限りあるものを限りないとかん違いすることで、多くの文明が自然と人間を圧迫し、その果てに滅んでいった。森が切られ、砂漠化が進み、農地には塩害が広がり、古代文明は滅んでいった。その後、限りあるものをいち早く手に入れようとする人間の果てしない欲望によって植民地化が進み、世界資本主義が地球を覆っていった。

限りあるものを限りないとかん違いすることも、それを独り占めすることも、どちらも文明を滅びに向かわせる。だから、限りあるものを正しく理解し、分かち合うことが重要である。金融資本主義も、限りあるものを限りないと錯覚したことから、大きな破局を招いたといえるだろう。現在、私たちは、以前よりも、限りある資源、土地、権利をいかに分かち合い、活用するかということに心をくだくようになっている。

これまでの文明は限りある資源、土地、権利を先に手に入れることによって繁栄を築いてきた。その矛盾を乗り越えるために限りあるものを分かち合うシェアの主張がなされてきた。しかし、シ

ェアの発想だけでは新文明を築く¹には不十分である。人類 70 億人みんなが近代文明の基準で豊かになりたい、大きな家に住みたい、大きな車に乗りたい、たくさん肉を食べたいと希望したら、その欲求を満たすことは不可能だ。人間は、限りあることだけを理解すると、われ先にそれを手に入れようとしてしまう。個人や私企業だけでなく、国家主導でマイナーメタル、レアアース、貴重な種子や農地、森林などを確保しようとする。限られた仕事を取り合う現象がどこでも起きてくる。一度豊かな財産、良い仕事を手にした者は、それを他人に取られまいと意識してしまう。ワークシェアリングの発想だけでは限界がある。

他の人が豊かになれば自分の利益が損なわれるのではないかという不安が心の壁になり、制度的、物理的な障壁をつくってしまう。資源や農地の獲得競争は限られたパイの取り合いの発想である。ますます膨れ上がる巨大人口をかかえるアジアで、心の壁が肥大化していけば文明に未来はないだろう。長期的展望で全体の衣食住とモビリティを考えていかなければならない。特定の間人だけが繁栄を享受し、他がそうでない状態がずっと続くならば、その文明には少なくとも大義はないだろう。

そこで、新しい文明は、限りあるものだけでなく限りないものにもっと目を向けることが必要だ。十字架につけられたイエスの衣は、兵士たちがくじびきをして分け合ったが、彼らが手に入れたのは限られた一片にすぎない。しかし、イエスが伝えようとしたメッセージは、限りない神の愛を人々が分かち合うことだった。仏陀の遺骨であるシャリも、つきることなく分け与えられてきた。貴重なものであるけれども、分けてなくなってしまうものではなかった。

良いものを分かち合っても、減らないための知恵と工夫が、今ほど求められている時代はない。「わたしの父の家には、すまいがたくさんある」(ヨハネ福音書 14 章 2 節) という精神をどのように具現化していくかが鍵である。イエスが山上で群衆に分けたパンと魚は、尽きることなく、皆に分け与えてもなお余った。このメタファーをプラスに応用した思想、技術が求められる。有限を基準にした思考から、無限を合わせた思考に転換しよう。分かち合うためには、有限なものを無限なものとの関係に置くことが課題になる。そのような思想を、**有限・無限論 (theory of the finite-infinite)**、**技術を有限・無限技術 (technology of the finite-infinite)** と呼ぶことにしよう。そして、限りあるものを占有しがちな人間の欲望を制御する道を求めよう。

地球上の全ての水のなかで利用可能な淡水は 0.1% しかないが、これを循環させれば再生可能な資源となる。限りある資源も循環させることによって、無限にできる。さらに無限に近い海水を濾過し、有限の淡水に転換することができる。また、有限を無限に転換する仕組みも必要である。RO 膜 (逆浸透膜 Reverse Osmosis Membrane) のように、海水に含まれる不純物質を濾過して水分子だけを取り出す特殊膜が開発されても、高価で枚数が限られていては役に立たない。何枚でも安価に製造でき、流通することが大切だ。

有限・無限論から分かち合いのパターンを考えてみると、次の 5 つが挙げられる²。

(1) 限りあるものをそのまま分かち合う

¹ 近年、日本の比較文明学会は、人類の過去の諸文明、とりわけ近代文明が内包している自然及び人間自身に対する収奪性を鋭く指摘するとともに、過度の収奪性を抑制し互惠性に基づくことのできる文明を「環流文明」と呼び、新たな文明の創造と研究を提唱している (比較文明学会 2010)。新文明の探求は、日本の比較文明研究において大きな関心事となっている。

² 限りないものを数学的な無限として抽象化すると、人間的な視点からどこまでも数えていく可能無限 (potential infinity) と、神の視点から一挙に無限を把握する実無限 (actual infinity) のどちらの立場で理解するのかという議論につながる。本論文では数学の無限論には立ち入らないが、筆者は、(2) (3) は可能無限、(4) (5) は両方の無限に当てはまると考えている。

- (2) 限りあるものを循環させることで限らないものとして分かち合う
- (3) 限りあるものを限らないものに転換して分かち合う
- (4) 限らないものを限りあるものに転換して分かち合う
- (5) 限らないものをそのまま分かち合う

有限と無限の関係は、人間にとって永遠のテーマだ。ヒンドゥー教、仏教、神道は、亡くなると魂は輪廻、循環すると考え、ユダヤ教、キリスト教、イスラームは現世からの転換、天国での救済を訴えた。キリスト教や観音信仰は、人間と生きとし生けるものを救うために、永遠の命をもった救い主が、限りある人間、衆生の前に現れると説いた。人間は、有限を無限につなげることによって希望を見出してきた。こうした思考形式は、私たちが気づきさえすれば、大きな広がり可能性をもっている。

韓国の伝統的な語り物パンソリの興甫歌（フンボガ）は、貧しいけれども善良な男・興甫（フンボ）が、助けたツバメにもらった瓢（ふくべ）の種を育て、金銀財宝と幸福を得る話だ。善良さが、無尽蔵の豊かさを生むことを示している。自然（＝ツバメ）に良いことをしたことで富を産み、みんなにその富を分け与えることができる。これは新文明の理想ではないだろうか。哀しいことに、ツバメの足をわざと折って、自然を傷つけて富を得ようとする興甫の兄（ノルボ）の姿に、現代の文明水準で生きる私たちの姿が重なってみえる。

新文明の理念：共有（commonship）

シェア（share）は古英語で切ることを意味するが（scearu）、切ったものを占有する意味合いも残っている。この言葉がどこか息苦しいのは、そのためだろうか。たとえば、市場占有率もマーケット・シェアという。しかし、シェアには、同じものを持ち合うことの方に關心を向ける、別の意味合いもある。漢字の分に相当する日本語の分ける、韓国語のナヌダも、同じものを共にもつ意味を込めて使われることが多い。分けることで心と心のつながりが生れ、目に見えない幸福が増すことを、古来の人々は知っていたのだろう。

そこで、共にもつ、という側面に着目し、**共有（commonship）**を、人間にとって必要な諸価値の総体が増えるように共にもつこと、と定義しよう。

英語表記は、友好による行為、感情、状態をあらわすことができる friendship に習って、共にもつ行為、感情、状態を含めることができるよう commonship という語を採用している。

共有は common ownership と訳されれば法律的な性格が強まり、限られた意味内容しか表現できない。法律上の共有（common ownership）は、数人が一つの物の所有権を分有し、各人がその物に対し持分をもち、その割合に応じて自由に使用、収益できることをいい、対象を排他的、包括的に支配する近代的な所有権思想を基礎としている³。

英語の common は、ラテン語 communis に由来し、「共に＋役立つ」あるいは「共に＋普通の」（いずれも com+mon）の意味がもととなっている。名詞では、イギリスにあった、誰もが自由に家畜を連れてきて草を食べさせることのできる牧草地のことをいった。その複数形がコモンズ（commons）で、一般に共有地を示す言葉として使われるようになったのである。

common 及び commons という言葉は、近年、政治学、経済学、文化人類学、資源人類学、社会学、森林社会学、都市論、情報科学、法社会学など、様々な学問分野やその複合領域で注目され、それぞ

³ 共有（common ownership）以外に、持分があっても分割請求が制限される合有（joint ownership）、持分そのものが観念できない総有（collective ownership）があるが、いずれも近代的な所有権思想が基準となっている。

れ重要な研究対象を特定するために用いられるようになった。ハーディン、オストロムらの研究以降⁴、コモンズ研究では、一国内のローカル・コモンズだけでなく、地球環境問題への関心から国境を超えるリージョナル・コモンズやグローバル・コモンズを唱える研究者、そして、IT革命やバイオテクノロジーの発展を受けてサイバー空間や知的財産をコモンズとして論じる研究者が登場し、多様な研究成果が積み重ねられてきた。研究者の関心によって対象とするコモンズの内容が大きく異なり、拡散する研究対象の相互関係を見出すことが困難になり、コモンズ概念拡張のメリット、デメリットが議論されている（日本法社会学会 2010）。

このような研究状況をふまえ、コモンズという客体からではなく、共にもつという行為からアプローチするのが、**共有研究 (study of commonship)** である。客体から主体の行為に視点を転換することによって、これまでのコモンズ研究の成果を取り入れながら、人間にとって必要な諸価値へのプラスの効果を中心にした、共有の動的な様相をとらえることができ、すでに存在しているコモンズだけに限定されず、未来に向けた考察も可能になる。

このような共有についての理論を**共有理論 (theory of commonship)** と名づけよう。じつは、共有には二つの手段がある。一つは、分けること。食べ物を分かち合う場合など。もう一つは、合わせること。二人でお金を出し合って一つの思い出の品を買う場合など。さらに、共有関係（誰と誰が共有するのか）、共有対象（何を共有するのか）、共有形態（共有によってどのように人間として必要な諸価値の総体が増えるのか）という、分析のポイントがある。共有関係を構成メンバー内に限らない場合があり、さらに人間と他の生き物や自然の关系到に拡張する場合も含めよう。また、共有対象を、後に述べるように、現代生活、伝統文化、自然の三領域において研究しよう。さらに、共有形態について、所有権にもとづく排他的な使用価値、交換価値、効用だけを問題にするのではなく、幸福価値や環境価値など人間として必要な諸価値をふくめ総合的に考えよう。

共有原理と生命資本主義

分け、又は、合わせて共にもつことにより、人間として必要な諸価値の総体が増すことを、**共有原理 (principle of commonship)** と呼ぼう。たとえば、幸せを分かち合うと、お互いの幸福感が増し、力を合わせれば予想以上の力が発揮される。

これに対し、排他的、包括的な占有によって、古典経済学やマルクス経済学でいう使用価値、交換価値、また、近代経済学でいう効用を保つこと、反対にいえば、分け、又は、合わせて共にもつことによって一人あたりの使用価値、交換価値、効用が低減することを、**占有原理 (principle of**

⁴ 生物学者ハーディンが、短期的利益を追求する合理的個人によって共有地は荒廃せざるをえないという「コモンズの悲劇」の問題を提起すると、経済学者オルソンの、共通目的が達成されれば、各人の努力の多い少ないに関わらず全ての成員が利益を享受できるため、合理的個人は共通目的達成をめざして行為しない、という「集合行為問題」と合わせて、近代経済学のモデルである合理的人間像と共有地のジレンマの解決が広汎に議論されるようになった (Olson 1965, Hardin 1968)。

政治学者オストロムは理論的、経験的アプローチによる学際的コモンズ研究プロジェクトを主導してこの課題に取り組んだ。そして、灌漑システム、森林、漁場などの共有地が世界各地で守られてきた経験的事実と経済理論の矛盾を、コモン・プール資源 (common-pool resource) という概念、および、限定的に合理的で規範を用いる人間像の導入によって解決し (Ostrom 1990, 1995)、2009 年度ノーベル経済学賞受賞につながった。

オストロムのコモン・プール資源は、十分に大きな自然あるいは人工的な資源システムで、その利用から得られる効用の潜在的受益者を排除するのにコストがかかるものと定義され、具体例として川、湖、海洋、その他の水域、漁場、地下水層、農地、灌漑システム、橋や駐車場、大型コンピュータなどが挙げられた。

occupation) と呼ぶことにする。

私的所有と社会的所有という対立軸に、共有と占有の対立軸が加われば、考察の幅が広がる。近代的な社会科学の発想では、私的所有も社会的所有も、占有原理を基礎に思考が組み立てられているのではないだろうか。ここに、共有原理を取り入れることで、新たな地平が開かれるだろう。



社会主義は、私的所有にもとづく資本主義の弊害を乗り越えるために社会的所有を唱える。とくに、土地や工場など生産手段の社会的所有が、その支柱となっている。しかし、2008年10月に開催された中国共産党第17期三中全会で、農民の土地使用権取引の促進が決定された。これが実質的な土地の私有化につながるとして、さまざまな議論を呼んでいる。このように私的所有と社会的所有の対立構造だけを中心に、社会を考察することには限界がある。

さらに、社会的所有であっても、占有を中心にシステムを組み立てていけば様々な弊害が生じてくる。北朝鮮の金剛山では、金日成一家の名前や事蹟がいたるところに彫られ、自然のままの岩肌を圧迫している。生産手段が社会的所有のもとにあったとしても、文化や自然の占有が進んでしまう矛盾が生じている。

一人あたりの使用価値、交換価値、効用だけに着目すると、一つの土地、モノ、知的財産、一定額のお金を分ければ、一人当たりの量は減ってしまう。しかし、共有原理では、共有関係および共有形態を拡張して、分けた人、分けられた人の幸福価値が増えることに注目する。そして、幸福価値等、使用価値とは別の価値の増加分が上回るなら、人間として必要な諸価値の総量が増えたと考ええる。

合わせる場合も同様である。二つ以上の土地、モノ、知的財産、お金を合わせても、単純な足し算の発想では、もとの一人あたりの使用価値、交換価値、効用は増えることはない。むしろ、一人で使用、交換する権利が制限され、それらの価値は低減してしまう。しかし、合わせた二人の幸福価値が増し、その増加分が、低減分を上回る場合を考えるのが、共有原理である。

近代文明のシステムは、主として占有原理を中心に組み立てられてきたのではないだろうか。人間にとって必要な諸価値がすべて限りあるものならば、共にもつても、その総体が増すことはない。共有原理の成立には、それら諸価値のいずれかが、先に述べた有限・無限論や有限・無限技術に関係していることが必要である。

ここで、共有原理を中心として発展していく文明を**共有文明 (Commonship Civilization)** と呼ぼう。生命そのものの価値を尊ぶ新しい資本主義システムへの転換をめざす李御寧博士の生命資本主義 (Vita Capitalism) や、スマートシティの概念を拡大し、より賢い惑星をめざす課題解決型サービスによって利益を生み出す IBM の Smarter Planet など、新たに登場している文明スケールの理念と比較することも重要な課題になるだろう。この点、共有原理は、生命の価値を正面から受けとめ、それを活かす生命資本主義の主張に符合する原理といえる。細胞は分裂して増え、苗木は株分けされて増える。雌雄が結ばれ一つになり、新たな生命が誕生する。分裂、合体のプロセスを通して増えることが、まさに生命現象の特徴であるからだ。

多地域・多領域革命

アジアには数多くの人間が生活し、いずれの社会も近代化の爪あとを経験している。共有原理の探求は、近代文明の負の遺産の克服に不可欠ではないだろうか。経済的発展を遂げた東北アジア三国はG20に参加する国力をもち、文化交流の蓄積ともいえる伝統文化を有し、地理的にも近く共通する自然の生態系が関心事となる。共有文明の探求にこの三国が協力することは、理にかなっているのではないだろうか。

孫文は、神戸で行った「大アジア主義講演」(1924)で、仁義道徳を中心とする文化、文明、すなわち王道によって、被圧迫民族の不平等を撤廃することを訴えた。この仁義道徳、政治的不平等撤廃を、新時代に合わせて解釈すれば、狭い占有原理を中心とした文明から、新たな共有原理を中心とした文明に転換しようということではないだろうか。孫文の時代に対抗する相手は西洋列強の覇道であったが、今日、対抗すべき相手は、近代文明のシステムそのもの、そして近代文明を導入してきた今日のアジアの在り方そのものに内在している。人間性を傷つける覇道的なシステム、思想、技術は、さまざまなところに見いだせる。

核兵器や空母、戦闘機などに莫大な予算を投じてきたアメリカの軍事政策を乗り越える知恵を絞ることも、近代文明の負の遺産の克服につながる。アメリカが11隻保有している原子力空母を、自分たちも保有しようという思考は、後追いの発想にとどまる。空母建造には数兆円規模の莫大な予算が必要だが、海空戦から陸海戦に主流が移り、強襲揚陸艦に主役が取って変わられれば、費用対効果は得られない。はるかに少ないコストで、アジアの全ての人々に役立つ海洋生態研究所、海賊を取り締まるシステム、海上移動可能な平和目的のメガフロートなどの開発に力をそそぐことの方が、本質的にアメリカの軍事政策を超える道になるだろう。新たな革命の針路は、西洋近代文明の負の遺産の内在的克服にある。

社会保障の限界、高い失業率、年金制度の行き詰まりなどの現実を見れば、やみくもに自国の制度だけを信じられない時代である。私たちが求めるべき東北アジアの未来戦略は、国家の枠組みにとどまらない、アジアを舞台として生きる人間の戦略である。国が何かをしてくれるのを待っているだけでは、幸福を求めることはできない。国家間では、大型国際プロジェクト受注やFTA、TPP推進など、経済活性化などの競争が繰り広げられている。しかし、自国の発展と個人の幸福が直結しない場合も多い。国家間の競争に加えて、各国が協同する未来ヴィジョンが必要となるゆえんだ。アジアを舞台として生きる人間の戦略として、共通課題を設定することが大切である。

政治的自由の有無にかかわらず疎外され、幸福不平等にある人々はアジア、世界のいずこにもいる。蓄積された不満が政情不安をつくり出し、国内対立を回避するため強硬なナショナリズムと結びつけば、パイの取り合いから国家間の衝突にいたる近代紛争のパターンにはまってしまう。希望を失い、見捨てられたと感じる人々をつくりださないような文明を求めなければならない。

孟子の説いた覇道と王道の違いは、現代では政治だけの問題ではなく文化、経済、宗教、技術、自然にもいえる。力によって少数が多数を支配するシステムから、道義によって多地域に住む人々の幸福をめざすシステムに転換していくところに、王道の大義があるだろう。政治的な格差だけでなく文化的、経済的格差を解消すること。宗教を力で押しつけるのではなく道義によって人々に貢献すること、力づくの技術でなく道義の裏づけのある技術であること。自然をただ従わせようとするのではなく自然と調和すること。このような**多地域・多領域革命**が、新たな時代に求められる王道だろう。

年間所得 3000 ドル未満の人々の潜在的市場規模は5兆ドルと見積もられている。これらの層はBOP (Base of the Pyramid) と呼ばれ、40億人いるといわれる。アジアはBOP ビジネスの対象となる人々を多く有している。しかし、BOP の課題は、単純に将来これらの人々すべてが、現在の先進国の人々と同じ生活をするだけで解決されるのではなく、環境負荷を減らすためのエネルギーや

循環システムなど新たなビジネス、技術、製品が誕生してこなければならぬ。BOP の課題は、共有文明の問題である。

2 共有創出と三国

共有創出

共有概念を理解するとき、もっとも大切なことは、心（こころと大和言葉でいい、マウムと韓国固有語でいう精神的身体的実体）が一緒にふるえること、響くことである。心の**共振 (resonance)**がおこることである。共感よりも、もっと積極的な心の状態だ。いっしょにおいしいものを食べ、楽しい経験をする。そのような仕掛けをどれだけ多く創り出せるかが、平和的発展の鍵となる。メディアはさかんに中国やインドを巨大なマーケットとして語るが、そこにはハートと五感をもった数多くの人々がいることをイメージしなければならない。

アジアを舞台に人々が共に楽しむ文明。そのようなヴィジョンをかたちにする上で日中韓三国には大きな責任がある。世界に通じる国力をつけ、地理的に近接して多くの文化を共有する三国は、アジアにおける共有文明形成のために欠かせない。現代は、ソフトパワーとしての文化を競う時代といわれる。韓流、日流、華流が競う。中国の孔子学院、韓国の韓流と韓スタイル、日本のクールジャパン。そして、世界を舞台に人々が文化を楽しむ。そこで、共有するものを共に楽しむという要素が加わると、新たな魅力、発展が生れるだろう。ドラマや映画の共同制作、国境を越えた歌手や俳優、スポーツ選手の活躍など日・韓・華流のコラボレーションからいかなる方向に飛躍すれば、さらに新たなステージへと歩みを進めることができるだろうか。

個人の限界を超え複数が共有できる精神性身体性を共振と考えればよいだろう。そして、いっしょに楽しい、幸せな想いをするという課題を新たなパラダイムの下に探求する。共有する対象そのものを新たに創り出す**共有創出 (creation of commonship)**、**創造的共有 (creative commonship)**の発想だ。

さらに、共有創出のうち、共有文明のために必要な呼称 (**共有名**) の創造に関わる研究分野を想定し、**共有文明表象論 (representation theory for the Commonship Civilization)**と呼んでみよう。現在の物や空間の呼称は、歴史、近代化の過程でつくられてきた。それらの中には、日本海・東海など、国どうしの主張が対立し、議論になっているものも少なくない。他方、生態学、生物学、物理学、化学などの自然科学や考古学上の発見、先端技術の開発が相次ぎ、新しい製品、建築も続々と登場している。呼称創造の役割は大きく、共有文明の創造に貢献できる新たな専門領域となる可能性がある。そのためには、自然科学と人文社会科学の知見を総合する必要がある。

以下では、現代生活における共有、伝統文化の共有、そして、自然の共有、自然との共有の三つの領域に分け、共有創出の事例と課題について素描してみよう。

現代生活における共有

a 宗教

宗教は本来最も尊いもの、聖なるものを人々の間で共有しようとしてきた。キリスト教は神とイエス・キリストから与えられた愛と聖霊を、浄土仏教は死後に救われて行く浄土を共有する。しかし、各宗教の出会いが加速した近代以降は、複数宗教文化間における共有が新たな課題になってきた。

神道を例に考えてみよう。もともと神道では神の分霊を他の土地に移して祀る勧請によって各地

に神社が建てられ、神霊を共有するシステムとして展開してきた。しかし、大日本帝国時代の海外における神社建設は、神道の真の国際化につながらなかった。植民地政策と連動したためであるが、そもそも共有対象が神霊そのものであることに無理があったといわなければならない。古来の神道的な感覚では、世界のどこでもその土地の森羅万象の背後に尊い霊を感じるのが自然である。神輿に乗せて神霊を運び、交流して戻ってくる。また、神霊に供えられた食べ物、お酒などの神饌（しんせん）やお賽銭など、心がこもった品々を海外にもっていき、自然を大切にする文化行事や祭礼に華をそえ、それらを共有する。このような道こそ可能性がある。

宗教の核心を無理に押しつけることなく、互いに宗教文化の優れたところを共有するための発想と実践が求められている。

b 衣

自然にやさしく安全で健康によく肌触りのよいものを着ることができ、その生産に携わっている人々、文化、その自然を思い浮かべ幸せな気持ちになることができれば、衣の文化の共有といえる。

岡山県倉敷市児島の Jippon (ジボン) の子供服は、縫製が丁寧でしっかりしており着心地がいい。子供に安心して着せられる。児島は国産ジーンズの発祥地で、以前からジーンズや学生服の生産拠点であったが、安い中国製品に押され、働き口がどんどん減ってしまっていた。しかし、縫製歴40年以上のキャリアをもつ内職主婦たちは健在で、訓練された優秀な専門学校生が10分かかる作業を1分20秒で仕上げってしまう技術をもつ。その人的資源を生かして安く高品質の子供服ブランドとして立ち上がり、Jippon の評判は口コミで広がって、一気に人気に火がついた。着心地がよく安全な服を子供に着せたいと願う親心は共通で、今では中国にも輸出されるようになった。売り場では、子供服をつくっている日本人主婦たちの技術の優秀さが写真入りで紹介され、価格と価値の関係が説明されている。

c 食

同じく、自然にやさしく安全で健康によく美味しいものを食べることができ、その生産に携わっている人々、文化、その自然を心に思い浮かべて幸せな気持ちになることができれば、食文化の共有といえる。なによりも、他の人々と共に食べ、味、香りの記憶を共にもつことこそ、食の共有である。近年問題になっている孤食はその反対といえる。

北朝鮮の金剛山の松茸を食べると、その美味しさは、京都の松茸とまた違った素晴らしさをもっていることが分かる。松林がどこまでも美しい朝鮮半島一の名山、その精気を思わせる記憶に残る味だ。金剛山の自然の息吹を共有している気持ちになる。このような体験をすると、日本産、韓国産、北朝鮮産、中国産というような松茸のランクづけがあまり意味をなさない場合があることを教えられる。また、中国の人々が青森の真っ赤な新品種りんご（大紅栄）をおいしいとって食べてくれるとき、日本の農家と中国の消費者は、視覚や味覚などの食感覚、青森のりんごというブランドを共有することになる。

食料輸送にともなう二酸化炭素排出量を考えれば、フード・マイレージの観点から地産地消のように地域内における食文化の共有が重要である。しかし、国境を越えた食文化の共有にも、遠く離れた人々と自然に対する理解を深めるといった大切な意義がある。

さらに、農作業の場を思いがけないかたちで共有した「落書きハウス」の例である。傘の先で穴を空ける子供たちのいたずらに悩まされていた徳島県鳴門市の大根農家が、注意するかわりにビニールハウスをキャンパスに見立てて欲しいと声をかけた。すると、子供たちは自由にのびのびと「落書き」するようになり、自分たちの願いを書くようになった。勉強を頑張りたい、スポーツの試合に勝ちたい、などから、大きな大根が育ちますようにと農家のために祈ってくれるもの、「雨にも負

けず、風にも負けず」など、有名な農民詩人、宮沢賢治の言葉まで現れた。ビニールは雨風に弱く、一ヶ月に一度は代えなければならないが、子供たちの言葉は捨てずに切り取って保管している。みんなの願いを受けて、厳しい仕事でもやりとおす気概が農家に芽生えた。

ビニールハウスは農家の所有物なので、落書きは軽犯罪に該当するが、「落書きハウス」では、子供たちがキャンパスとして共有を楽しむようになった。お互いに相手を思いやることで心が通い合い、農地は仕事場だけでなく、遊び場、世代間コミュニケーションの場になる。自然の光と風をうけて、春大根の葉と土が透けて見えるキャンパス、近くの知的障害者施設や保育園の子供たちを招いた落書き大会も開かれた。こうして育った大根を地域の学校や家庭で調理して食べたら、どれほど素敵なことだろうか。

思えば、学校に通う道すがら、田んぼや畑は、子供たちにとって自然を体験し、季節の移り変わりを感じるもうひとつの大切な学校だった。それが占有原理を優先することで人々の心に壁ができ、物理的な壁に転じて一瞬のうちに冷ややかな空間が広がってしまった。だからこそ、逆に、農地における共有創出は人々の心の交流を生み、幸福感を増す可能性を秘めている。

d 住

サッカー・アジアカップ 2011 の日本チームの決勝ゴールは、在日四世の李忠成選手の足から生まれ、日韓のメディアがその活躍をたたえた。一人の選手が、韓国と日本の二国の文化を背景に育ち、二つのふるさとをもっているというのは、逆にいえば、二つのふるさとが一人の人間を共有していることでもある。国境を越えて活躍する人材は、あらゆる分野においてますます必要となってくる。そのような人々が第二、第三のふるさとを心にもち、各国で共有できれば、互いにとってプラスだろう。ふるさとに対する考えが民族によって異なるとしても、親しみある国、都市、町、村を複数もつこと、さらには国境を越えて住文化を共有することの意味をもっと深めてもいい。

日本では、自治体国際化協会によると 2010 年末までにアメリカ 434、中国 337 (台湾 11)、韓国 133 の姉妹提携を結んでおり、韓国では、全国市道知事協議会によれば 2011 年 2 月までに中国 448 (台湾 13)、日本 163、アメリカ 139 の姉妹都市・友好都市提携を結んでいる。

姉妹都市はアメリカの Sister Cities に由来する言葉だ。双子都市 (Twin Cities)、友好都市、親善都市ともいうが、姉妹都市という呼称がもっとも普及している。フランス語などで都市が女性名詞のためというが、ロシアでは男性名詞で兄弟都市という。

しかし、家族は、姉妹関係より豊かであり、朋友は日本ではあまり使われないが、友好や親善よりも深い間柄を表す。欧米に比べ、地理的に近いメリットを生かして、人材交流の新たなかたちとして、家族都市・家族町・家族村、または、朋友都市・朋友町・朋友村 (朋あり、遠方より来たる、亦た楽しからずや 有朋自遠方来 不亦楽朋) というコンセプトを打ち出し、東北アジアの文化に合った交流を試みてはどうだろうか。たとえば、相互に教員、公務員、通訳者を交換派遣し、現代の阿倍仲麻呂や五経博士にあたる人材交流の波をつくりだす。家族都市間、朋友都市間では第二、第三のふるさとをもつ人材を共有していく。相互メリットが高い提携をこれまで以上に研究し、国家間の主張や利害の対立が起きることを想定して対応マニュアルを作成しておけばいいだろう。

e 人口

アジアの長期的な発展のためには、人口の波の経験を各国で共有することが必要になってくる。現在の日本の少子高齢化は、韓国、中国、アセアン、インドの順で経験することになり、これを「人口の雁行形態」という (名和 2006)。とくに中国は 2020 年代に人口減少に転じ、2030 年代に現在の日本の老年人口割合に到達するため、日本の 10 倍以上の規模で少子高齢化問題に直面する。それにより労働者人口が減れば貯蓄が減少し、投資活動が制約され、国全体の金融システムが弱体化し、

経済成長が減速してしまう。

そこで少子高齢化に対応した文化、経済の構築が不可欠になる。たとえば高齢者や女性の労働市場を開拓し、国全体の貯蓄をのばす工夫が求められる。日本の直面している人口の波の変化は、アジア全体の発展のため、研究に取り組むべき課題なのである。

f 言語

文字は感情や考えを共有する重要な手段である。日中韓で共用漢字 500 を選定して学校教育に導入する提言などがなされているが、ハードルは高いようである。

そこで、表記の統一が必要な共用漢字よりも先に、未来につながる交流に不可欠で意味のズレが少ない最重要の漢字熟語を選び、三言語を英語もふくめて併記する共有漢字 50 を定めてはどうだろうか。たとえば、環境は [環境・环境・환경・environment] となる。このような共用漢字の考え方は、日中韓英のマルチリンガル辞書の発想につながる。美しいレイアウトのもとに表示されるソフトウェアがあれば、言葉の共有意識を高めることができるのではないだろうか。日本では、民間の会社である日中韓辞典研究所が、すでに 300 万項目の日中韓固有名詞データを構築し、世界の IT 企業の利用に供している。

g 情報

人間は情報を共有したいという本能を持っている。

ウィキリークスと Facebook の成功の理由は、この人間の本能に訴えかけているところにある。情報の占有と共有をめぐるあつれきが世界中で進行し、大きな問題となってきた。アメリカ政府が 2009 年に機密指定した情報は 18 万件以上で、2010 年には約 85 万 4000 人が最高機密にアクセスする許可が与えられていた。このように秘密に値しない情報が秘密扱いされることで秘密のインフレが起り、さらに機密にアクセスする権限が民間請負業者に与えられるなどして、国家安全保障体制への信頼が崩れてしまったことが (Calabresi 2010) 、ウィキリークスへの支持につながったのである。

私たちが共有すべき情報は何なのか。誰が情報の占有と共有の境目に線を引くのか。ウィキリークス問題の核心は、この問いにこそある。

h 製品・技術

Made in Japan, Made in Korea, Made in China・・・というように今日の製品には、ナショナルティの焼印が押されている。主要構成部品を中国で製造し、日本で組み立てた場合には Manufactured in China, Assembled in Japan とする場合もあるが、中国と日本の絆が実感できる表記ではない。たとえば、主要部品の製造国と組み立て国の順に Made in China-Japan と表記すれば、両国の経済関係が視覚的に理解できる。さらにいえば、Made in Shanghai-Tokyo のように地域名が表示される仕組みも、面白いだろう。アジア域内の国境を超える経済活動によって生み出された優品こそ、プレミアム・アジアの名にふさわしい。

i お金

グラミン銀行以降、IT 技術の発達で国境を超えるユニークな成功例が誕生しているマイクロファイナンス (少額小口融資) も、お金の新しい共有形態ととらえることができる。

マイクロファイナンスは投資でも寄付でもないといわれる。投資は利己的な経済活動、寄付は利他的な慈善活動だが、両者には隠れた共通点がある。それはお金の独占的な所有権が基礎になって

いる。寄付は、お金の独占的な所有権が相手方に移り、寄付の後、子供の教育でなく飲酒や賭事に使用されたとしても有効な対応手段はない。したがって、貸し手はお金の所有権と使用权を分け、使用权を一時的に借り手に移すことによって、お金を共有したのである。借り手の生活が向上することで、借り手が幸福になり、それを知った貸し手も幸福になるという、互いの幸福価値の増加を期待するシステムである。このお金の共有によってお金自体は増えない例がほとんどだが、貸し手と借り手の幸福価値が増し、共有原理が満たされる。

従来は国家の開発援助金、事業ファンド、慈善団体、募金組織による寄付や貸付に頼らざるをえなかったが、新しいタイプのマイクロファイナンスを実現したNPO法人の登場で、もっと暮らしを良くしたいと考える個人に対して、それを助けたいと考える個人が貢献できる道が開かれてきた。2005年にアメリカで設立されたKiva（スワヒリ語で調和を意味する）は、PayPalなどのIT技術を駆使し、25ドルからの国境を超える小口融資を可能にし、2010年9月までに50万人から1.6億ドルを集め、めざましい実績を挙げた。これに類する取り組みは、アジアにおいても始まっている。

そもそもお金と共有の関係はマイクロファイナンスに限らない。お金の有効活用を、共有原理に照らして考えることで、新文明にふさわしい金融システムが模索されていくだろう。

伝統文化と共有

伝統文化は温故知新を発展させる温故創新のための、つきることのない資源である。ここでは、人格、文化象徴、文化遺産について、共有創出の視点から言及しておこう。

i 共有人格

優れた師の人格と教養は、弟子たちが憧れ、慕い、共有するものだった。孔子が『論語』のなかで語る君子の理念は、そのような人間のモデルである。孔子そのものが空のように限りない気高さをもった人格を体現している。**共有人格**の例といってもいいだろう。日本でも韓国でも孔子、孟子、朱子などの優れた人格は尊ばれてきた。人格の魅力を認め合う伝統は大切である。聖徳太子と慧慈、空海と恵果、道元と如浄のように、また、魯迅の「藤野先生」のように師弟関係への共感や憧れは国境を超える性質をもっている。

ii 共有文化象徴

共有文化象徴は、国境や時間の壁を超えて自然のつながりと文化交流を肌で感じることができる、文化における象徴物である。たとえば、三国が共有する四君子の植物である梅竹蘭菊や十二支動物の象徴は、三国の説話、宗教、民俗、文学、建築、庭など伝統文化の隅々に取り入れられている。このような文化象徴は、東アジア共有文化象徴といってもいいだろう。

iii 共有文化遺産

共有文化遺産は、文化交流の名残を深くとどめる文化遺産である。そこでは、宗教文化、伝統技術、自然が一体となって結晶化しているものが多い。とくに日中韓の文化交流によって歴史を共有してきた文化遺産を東アジア共有文化遺産として受けとめたい。これについては、とくに付章で論じよう。

自然と共有

α 風と空

オランダのアーティスト、テオ・ヤンセンは、チーズ色の黄色いプラスチックチューブを組み合わせて、風のエネルギーだけを取り込んで歩く不可思議な構造体を生み出し、次々にその進化型を

発表し続けている。ストランド・ビースト、そして風を食べる生物とも呼ばれるその構造体によって、彼は自然の風が生命体に働きかける、想像を超えた可能性を可視化することに成功した。

私たちは空を、そして、そこに吹く風を共有している。赤道の偏西風がヒマラヤ山脈にぶつかって進路を変えた後、インド洋の水蒸気をあつめながら、中国南部上空、韓国上空を通り、太平洋の水蒸気を集め、日本に到達する。この風が、東アジアの豊かな森をつくりだしてきた。ヒマラヤ山脈の高度がもし半分以下になれば、偏西風がぶつかる壁がなくなり、たくさんの水蒸気をふくんだ風が到来することはなく、日本の梅雨もなくなってしまうことがシミュレーションから分かってきた。

まさに森は、風のエネルギーを食べることで成長してきたのだ。この風のルートを飛ぶ、国際気球競技を構想すれば、東アジアの森を育ててきた風の存在を誰もが実感できるだろう。『ハリーポッター』の中に出てくる架空の球技、クィディッチでさえ、映画化され、現実世界でもチームが結成された。こちらは気球があればよく、より実現性が高い。

新文明には最新の気象学、生態学の成果を取り入れた、自然とのつながりを実感できる新たなスポーツが待たれる。東アジアに吹く風は、黄砂だけでなく、緑を育む雨を運んでしてくれるのだ。

β海

自然は、人間の表象作用によって歴史的に分節されてきた。各国によって、海や島の呼び名が異なることはその顕著な例である。今日、複数文化の出会いによって様々なあつれきも生じている。たとえば、日本海・東海の呼称問題を現段階で円満解決することは、まず不可能に思われる。

日本ではキュウリエソ、学名は *Maurollicus Japonicus* と呼ばれる、日本海・東海における唯一の中層遊泳性深海魚がいる。韓国ではエルトゥンイ、北朝鮮はオイメテビという。この魚は推定2兆2千億匹といわれ、たった一種でこの海の世界連鎖を支えていることが明らかになってきた。この魚に新しい共通の名前を与えてはどうだろうか。共有名をつけることによって、この海の世界環境、平和意識を高めることをめざすのだ。このような、人間は食べないけれども、生態系を支えるかけがえのない存在こそ、共有する海を象徴するのにふさわしい。たとえば、「唯」という漢字一字の名をあててもよい。無限に近く増えていく魚がじつは一種類であり、これが減少すると海の世界豊かな生態系がダメージを受ける。かけがえのない唯が住む海ということで日本海も東海も「唯の海」というニックネームをつけてもいい。そして、唯の海を大切にしよう、守ろうという意識を育てることができるだろう。国連地名標準化会議など今日の機関の限界を、新しい領域・対象の呼称創造で乗り越えようとする共有文明象徴論の適用例である。

太平洋艦隊司令官やアメリカ大統領の名前をつけた11隻の原子力空母が往来する現実が、現代文明の水準を示している。2015年には建造中の中国の原子力空母二隻も就航する。軍事兵器の呼称は、各国の力を誇示するようにみえる。だからこそ、平和的な調査船、輸送船には国家の違いを超えて共有できる名前をつけることが、共有文明のための貢献になるのではないだろうか。たとえば、日中韓三国の海域をめぐる海洋生態調査船を協同で運航し、善女龍王と名づけてはどうだろうか。インドや三国で尊ばれた『法華経』に登場する龍王の娘で、幼い身でありながら仏の教えを聴いて悟りを開いた少女のイメージは、平和の海にふさわしい。一国の軍事力を象徴する空母の名だけでなく、複数の国家の平和友好の希求を象徴する調査船の名が私たちの心に刻まれ、メディアをにぎわすようになってほしいものだ。

γ山

富士山は日本人がつくったものではない。また、富士山に憧れる中国人も、日本からこれを中国に持って行こうというのではない。日本人も中国人も同じ山を愛でる。江戸時代の朝鮮通信使一行

も富士山を愛でた。富士山だけではない。金剛山や泰山など各地にある名山は、心のなかで分かち合える、**共有自然遺産**であるのだ。

3 新文明の共有軸

旧文明の軸からの離脱

哲学者カール・ヤスパースが述べた文明の軸は、長い人類史の流れからすればほぼ同時期に、すなわち紀元前800年から200年に西洋、インド、中国において発生し、世界宗教を育んだ精神基軸であり、後世の人々が常にふりかえるべきものであった。しかし、互いに異なった地域で生まれたこれらの精神基軸は、世界宗教の展開のなかで出会いを繰り返すという事態が生じた。さらに、近代科学技術の登場で、文明は、軸からの離脱を始め、今日にいたっている。近代文明は、前近代文明と異なり、軸をはずれた文明である。

したがって、新たな文明の軸は、私たちがふりかえるべき対象ではなく、見出し、そこに向かうべきものである。その探求は、メソポタミアやエジプトの宗教からユダヤ教やキリスト教を、ヒンドゥー教から仏教を、中国古代宗教から儒教をデザインしようとするような、困難な試みである。そこには、当然、古の人々が古代高度文化の状態から世界宗教につながる精神基軸に転換したような、本質的な飛躍が必要である。

ヤスパースが論じた旧文明の軸は、ペシミスティックなメッセージとオプティミスティックなメッセージの両方をもっていた。徹底的な現世批判を行い、この世の終末や地獄の苦しみを描くとともに、神の救済、愛、悟り、天国などの教えを伝えた。新文明の軸も同様に、ペシミスティックな批判とオプティミスティックな希望がなければならぬだろう。近代文明が、多くの人間が幸福を共有できず、自然にたくさんの負荷をかけていることを分析するとともに、良い未来を導く新文明の方向性が示されなければならないだろう。

ヤスパースの問題提起に重ねていえば、新文明の軸は、世界宗教の出会い、そして、近代科学技術の展開をふまえ、これらを新たな方向に転換させるヴィジョンによって見出されるはずだ。加えて、今日、自然環境も新文明の重要な要件となっている。そこで、宗教文化、技術、自然の三つをどのように理解し、相互に関係づけるかが、新文明の軸の課題となる。共有原理を中心として発展していく文明の軸であるから、これを**共有軸 (Axis for commonship)**と呼ぼう。出雲大社の心御柱が三本の柱でできており、聖書に「三つ撚りの糸は簡単には切れない」(伝道者の書:4章12節)という言葉があるように、新文明の共有軸は、三つのファクターで構成される。

それが、以下に述べる共有宗教文化、共有技術、生命自然である。

共有宗教文化

共有宗教文化 (commonship religious cultures) とは、開かれた社会の人々によって共有され、新文明に必要な技術(共有技術)に文化的認証を与え、また、新文明が理解する自然(生命自然)に文化的価値を与える、それぞれの宗教文化、そして、それらの総称である。

新文明では、宗教に対する二段構えの感性が必要になる。信仰としての宗教(または、信条としての無宗教)と文化としての宗教である。たとえば、文化としての仏教、儒教、キリスト教の価値にふれれば、仏を信じない人も心の平安を、儒教の外にある人も家族的なつながりのすばらしさを、また、キリスト教の外にある人も神の愛のあたたかさを、感じ、共有することができる。このように、文化における複数宗教の価値を生かすことが鍵となる(濱田 2005)。

従来の宗教間対話は、宗教の中だけで、また政治、経済、環境の二次的ファクターとして対話を行っていたため限界があった。そこで、新文明の軸として、それぞれの宗教文化が技術、自然に関わるかを本格的に議論、研究するシステムを導入すれば、創造的な宗教文化間対話を発展させることができるだろう。技術、自然に素養のある宗教者、宗教に素養のある技術者、科学者を確保、育成し、宗教文化がどのような技術、どのような自然への関わりを支持し、それらに文化的な認証と価値を与えるのかを明らかにしていくのである。

イスラームでは、食品をハラル（許された）、シュブハ（疑わしい）、ハラム（禁じられた）の三段階に分け、イスラームの教えを守って加工された食品にのみハラル認証のマークを与えている。イスラーム文化になじみがない者にはとまどうかもしれないが、ハラル認証を受けた食品には新たな価値が生まれ、14億人といわれる信者を市場としてハラルビジネスの一大マーケットが形成されている。禅文化が認めた食品や懐石料理なども、これに似ている。永平寺御用達の印がつくだけで、ごま豆腐や味噌に重み加わる。禅の教えにかなった、自然にやさしい、安全な素材を選び抜いてつくられているというお墨付きが与えられるからである。宗教文化による認証は、単なる規制ではなく、価値創造と表裏一体である。もし、そのような認証の仕組みを宗教文化間において発展させ、新文明に必要な技術に適用していけば、宗教文化の資源を生かし、技術に信頼と価値を与えることができるだろう。

この認証は、あくまでも文化的認証であって、法的拘束力はなく、文化的拘束力と文化的価値づけを与えるものと考えべきである。しかし、バイオテクノロジー、ナノテクノロジー、材料科学のような先端科学 (advanced science) も含め、人間の生活と生態系に大きな影響を及ぼす可能性のある技術について、宗教文化の立場からいかなる認識が与えられるのか、明らかにしていくことが必要である。

ところで、牛や豚の口蹄疫や鳥インフルエンザなど、畜産業に影響を与える病気が広がると、膨大な数の家畜が「処分」されてしまう。このようなリスクが、現代文明に織り込まれているとしたら、それは文明における構造的犠牲と考えなければならない。現在、世界には200億頭の牛・豚・鳥がいるといわれる。人類の3倍以上である。世界全体で排出される温室効果ガスのうち食肉生産工程で排出される割合は18%であり、飼料作物の栽培を含めると世界の農地の約70%が食肉生産のために使用されている (Mattea 2011)。新しい文明は、こうした構造的犠牲の問題について、深い思索を巡らす文明でなければならない。そのためにも、共有宗教文化が必要である。宗教は、畜産業や医薬品、化粧品の開発に用いられた動物たちのために祈りを捧げてきた。その実践を、多くの人々が共有することで、より適切な畜産業や、医薬品、化粧品の代替法など倫理的により優れた技術が広がっていくだろう。

共有技術

共有技術 (commonship technology) とは、共有文明を築くのに役立つ、新旧の技術のことである。

新しい技術としては、再生可能エネルギー、バイオミメティクス (生物模倣技術 Biomimetics)、デジログ (デジタルとアナログの融合 李御寧) 等が挙げられるだろう。そして、共有技術のもつ一つの特徴を表した表現が、第一章に述べた有限・無限技術である。

共有技術と自然の関係は、近代文明がかけてきた環境負荷をやわらげ、低減していくことにある。海水淡水化のRO膜 (逆浸透膜 Reverse Osmosis Membrane) や、電力をロスなく送る超電導送電線、人工光合成など、従来の常識、壁を乗り越える試みが続いている。改善のみでなく、革新的技術の開発に取り組む、多数の技術者が活躍している。

共有技術と共有宗教文化の関係は、たとえば、高度な複製技術により、宗教文化遺産の新しい共

有化をうながすことなどがある。興福寺の阿修羅像の携帯アプリが高精細画像で提供されるなど、宗教文化遺産が多くの人々にとって身近なものになってきた。ポイントは、高精細画像やソフトウェアの力をかりて、精神性が物質性を獲得した宗教文化遺産の重層的な情報(背景にある宗教思想、製作者の想い、歴史的経年変化等)を心に刻みこむことができるようになることである。こうした複製技術は、オリジナルな文化遺産の研究・修復・保存にも生かされている。

生命自然

生命自然 (life nature) とは、生命を生み出し、生命を含み、生命とともにある自然のことである。

すなわち、地球上の自然は、すべて生命自然である。この概念は、もっぱら人間の観察、操作の対象とだけ位置づけられてきた近代的な自然概念と異なっている。宇宙は恒星の核融合や超新星爆発によって生命に必要な元素を生み出した。したがって、物理学で唱えられる、宇宙は人間が生存できるような自然法則になっていたから人間が存在しているという「人間原理」(S・ワインバーグ等)を、宇宙は生命が存在できるような自然法則になっていたから生命が存在しているという「生命原理」に拡大して解釈してよいだろう。人間も、他の生命と同様、動的平衡(dynamic equilibrium)の状態にあり、半年もすれば身体を構成する分子が全て入れ替わってしまう。

新文明においては、この生命自然が共有軸のもっとも大切な要素となるだろう。共有宗教文化はこれに文化的価値を与える。太陽や月の背後に尊い存在を感じた瞬間、生命にエネルギーを与える太陽と農業に豊穡をもたらす月が宗教文化的な価値を帯びて輝く。そして、共有技術は、共有文明に欠かせない素材とエネルギーについて、生命自然から無限の可能性を導こうとするのである。

文献

遠山啓『無限と連続』岩波新書、1952

ヤスパース、カール『歴史の起源と目標』重田英世訳、理想社、1964 (1949)

Olson, Mancur. *The Logic of Collective Action*, Harvard University Press, 1965 (オルソン、マンサー『集合行為論：公共財と集団理論』依田博・森脇俊雅訳、ミネルヴァ書房、1983)

陳徳仁・安井三吉編『孫文・講演「大アジア主義」資料集-1924年11月 日本と中国の岐路』法律文化社、1989

Ostrom, Elinor. *Governing the Commons: The Evolutions of Institutions for Collective Action*, Cambridge University Press, 1990.

山折哲雄編『日本の神 I 神の始原』平凡社、1995

ハーツ、ノリーナ『巨大企業が民主主義を滅ぼす』早川書房、2003

Ostrom, Elinor. *Understanding institutional diversity*. Princeton University Press, 2005

Moran, Emilio F. & Ostrom, Elinor ed. *Seeing the forest and the trees: human-environment interactions in forest ecosystems*. MIT Press, 2005

濱田陽『共存の哲学 複数宗教からの思考形式』弘文堂、2005

池俊介『村落共有地空間の観光的利用』風間書房、2006

黒川紀章『都市革命 公有から共有へ』中央公論新社、2006

名和小太郎『情報の私有・共有・公有 ユーザーからみた著作権』NTT出版、2006

伊東俊太郎「“文明としてのアジア” アジアという概念への序説」『比較文明 特集 比較文明学からのアジア再検討』比較文明学会、2006

秋道智彌編『資源とコモンズ』弘文堂、2007

小峰隆夫・日本経済研究センター編『超長期予測 老いるアジア』日本経済新聞出版社、2007

菅原和孝編『身体資源の共有』弘文堂、2007

福岡伸一『生物と無生物のあいだ』講談社現代新書、2007

剣持久木他『歴史認識共有の地平 独仏共通教科書と日中韓の試み』明石書店、2009

サックス、ジェフリー『地球全体を幸福にする経済学 一過密化する世界とグローバル・ゴール』野中邦子訳、早川書房、2009 (Jeffrey D. Sachs, *Common Wealth: Economics for a Crowded Planet*. Penguin, 2009)

長崎勤他編著『自閉症児のための社会性発達支援プログラム 意図と情動の共有による共同行為』日本文化科学社、2009

日本法社会学会編『コモンズと法』法社会学第73号、有斐閣、2010

比較文明学会「第27回大会基調講演 文明もまた還流の道を 染谷臣道」第27回シンポジウム 収奪文明から還流文明へ」行人社、2010

Calabresi, Massimo. 'WikiLeaks' War on Secrecy: Truth's Consequences' TIME, Dec. 02, 2010. (「ウィキリークスの衝撃「いま、歴史が変わる」」『クーリエ・ジャポン』2011年2月号、講談社)

Battaglia, Mattea 「このまま肉を食べ続けて大丈夫？」『クーリエ・ジャポン』2011年2月号、講談社

Aezel, Amir D. 「統一理論の父 ワインバーグに聞く」『日経サイエンス』2011年2月号、日経サイエンス社

付節 東アジア共有文化遺産の夢

2010年6月11日、東京の韓国文化院で開催された第2回韓日中文化国際シンポジウムにおける劉建輝氏の報告「三百年の混迷」は、東アジア三国が近代西洋の波にさらされ（近代資本主義や近代的キリスト教等）、国民国家形成と自由や個人のパラダイムを追求した帰結について、含蓄深いパノラマを描いている。そのポイントは次の三点にまとめられよう。

- 1) 中東、インド、南米のいずれの文明圏とも違い、東アジア圏が高度の経済発展と近代化を実現させたこと
- 2) この成功は近代西洋の文明を咀嚼し得る文化資本（儒教や漢字など）を東アジア三国がそれぞれに高い水準で有していた点に起因すること
- 3) この成功ゆえに過当競争と孤独化が激化・進行し、いずれの文明圏よりも近代化の負のインパクトを受け、自殺・離婚・児童虐待・受験地獄等が深刻化していること

そして、印象深いのは、こうした負のインパクトにもかかわらず、共有文化を持ち、近代化の正負両面を共に経験している東アジア三国は、対等関係を維持し過度なナショナリズムを制御していくことができれば、その文化資本と共通経験をもって新時代の文化圏をつくっていけるであろう、と結んでいることである。つまり、劉氏は、日本と韓国の近代化の経験を巨大かつ独自の規模でさらに上書きしてきた中国の事例を私たちの前に示しつつ、筆者の言葉でいえば、未来100年の課題を〈三国の違いを踏まえた上での、共有文化伝統・共通近代経験の生かし方〉というかたちに定式化しているといえる。

筆者は、このうち共有文化伝統の生かし方について、劉氏の問いかけに応答してみたい。それは、**東アジア共有文化遺産**のヴィジョンである。今日、人々の注目は、世界文化遺産と国宝に集まるが、その間が抜けてしまっている。いわばグローバルとナショナルの間を満たす文化装置が希薄なのである。事務を統括する世界遺産センターがパリのユネスコ本部内にあることに象徴されるように、世界遺産という制度のもとでは、西洋に傾斜しがちな視線を東アジア地域に転じることは難しい。そこで、東アジア文化共同体を構想するなら、その内実を代表するものとして東アジアの文化交流の精華であり、共通して誇り伝えるべき東アジア共有文化遺産を三国が協力して設けてはどうだろうか。

二国以上の文化交流に関わる文化遺産ということにすれば、たとえば、日本の百濟伝来の善光寺（長野県）阿弥陀三尊像、広隆寺及び中宮寺の弥勒菩薩半跏思惟像、唐招提寺と鑑真和上像、韓国の海印寺と八萬大藏經、二体の国宝弥勒菩薩半跏思惟像、北朝鮮の高句麗古墳壁画（高松塚古墳壁画等との共通性）、中国の国清寺（最澄留学）、西湖（『源氏物語』、芭蕉が引用）など、少し考えただけでも様々な候補が挙げられるだろう。

もちろんこれらは数ある例の一つにすぎず、その選定そのものを文化共同体マインドの醸成に生かしていく発想が大切である。このようなパラダイムがあれば、専門の研究者に限らず一般の多くの人々が、一つの文化財を世界遺産でもあり、東アジア共有文化遺産でもあり、国宝でもある、というような重層的で柔軟な視点で見ることができるようになる。そうなれば、東アジア地域の新旧文化交流について幅広い関心を引き起こすための仕掛けを、広範囲かつ多彩に展開することが可能になるだろう。

東アジア共有文化遺産は、現在の世界遺産がそうであるように、完全なリストではなく常に問い直しつづけるべきものである。また、東アジアだけに閉じた意識ではなく、世界レベル、国レベル、そして東アジア以外の文明圏に開かれた文化理解によって設定されなければならない。たとえば、

仏教文化であれば、三国だけでなくインドとの関わりが浮上するだろう。

こうしたアイデアをヴァーチャルに描いてみることは可能である。三国が協力して人的、物的資源を投入し、試験的に取り組む東アジア共有文化遺産準備委員会が発足し、運営されることを想像してみよう。おそらく文化財に対する思想・制度の違い、表記法の違いなど様々な課題が浮上するであろう。しかし、そうした課題そのものが、東アジア文化共同体を考える重要な鍵となる。実績がともなえば、台湾や北朝鮮も加わることができるだろう。

東アジア共有文化遺産のような、東アジア各国が共通して取り組む恒常的な仕組みがあれば、新しい東アジア文化共同体への関心を幅広く喚起することができるにちがいない。そして、東アジア共有文化遺産に限らず、文化交流マインドから文化共有マインド、さらには文化共同体マインドを温める夢を数多く見ていくことで、共通近代経験の負のインパクトを解決する新たな発想を生み出すことにもつながっていくのではないだろうか。